

【脊柱変形】

骨粗鬆症性椎体骨折の 予防と治療

市立豊中病院整形外科 柏井 将文

KEY WORDS

- 骨粗鬆症
- 椎体骨折
- 骨粗鬆症治療薬
- 二次骨折予防
- 脊柱後弯

Prevention and treatment for
osteoporotic vertebral fractures.
Masafumi Kashii (医長)

はじめに

骨粗鬆症性脊椎椎体骨折(以下, 椎体骨折)は, 脆弱性骨折による急性疼痛, 続発する脊柱変形による慢性疼痛を引き起こす¹⁾。脊柱後弯変形の進行による姿勢悪化や胃食道部障害・換気量の低下などの内臓臓器機能障害は高齢者におけるADL低下の原因となる¹⁾。

一般に椎体骨折は保存治療により良好な治療成績が得られることが多いが, 確定診断の遅れなどにより骨折部の治療が遷延し, 偽関節化することも少なくない(図1)²⁾。さらに遷延治療や偽関節から遅発性神経麻痺を生じることもある。癒合不全, 遅発性神経麻痺, 脊柱変形による障害が一般的に外科手術の適応となる²⁾。本稿では, 椎体骨折の二次予防の重要性と, 現在使用されている骨粗鬆症治療薬の脊椎骨折予防効果などについて概説する。また新規椎体骨折患者や脊椎手術後の骨粗鬆症患者における骨粗鬆症治療薬の使用

についても触れる。

I. 椎体骨折後の 二次骨折予防の 重要性

骨折の予防は一次予防と二次予防に分けられる。椎体骨折は骨粗鬆症により生じる脆弱性骨折の初発部位であることが多いため, 既往脆弱性骨折のない患者に対する積極的な椎体骨折発生の危険性の評価と, 危険性が高い患者に対する早期からの介入で, 骨折を予防すること(一次予防)はもちろん重要である。しかしながら, 骨折の一次予防以上に二次予防は重要な課題である。脆弱性骨折を一度でも起こすと, 将来的な骨折リスクが大幅に高まり, 脆弱性骨折の連鎖をもたらす。疫学的に骨折リスクを高める主な原因は, ①既存の脆弱性骨折, ②加齢, ③低骨量であり, 既存椎体骨折が1つあると将来の椎体骨折の骨折リスクは約4倍に高ま